

竜土会寄せ書と独歩の「東洋画報」

野田宇太郎

日本文学史にも自然主義といふ呼び方が当然のこのやうに使はれてゐるし、自然主義作家のグループも既定の事実のやうに扱はれてゐるが、自然主義は *Naturalisme* の訳語であつて、フランスの *Naturalisme* がそのまゝ日本文学の流派 (*ecole*) に通用すると理解しては間違ひである。日本文学の自然主義はむしろヨーロッパ主義ともいふべきであり、ヨーロッパの様々な文学思潮を受け容れた近代主義文学として理解すべきことは云ふまでもあるまい。さういふ日本近代文学の複雑性をあらはしてゐたのが竜土会の文学者の集りだつたと云つてよい。

竜土会は東京麻布新竜土町のフランス料理竜土軒をサロンにみたてて催された、明治後期の詩人や作家を中心とした会であつた。正面切つた一つの文学運動の集りではなく、文学趣味をもつて集る親しい同士がお互の見聞や考へを話しあつて、お互の勉強に資しようとするのが当面の目的だつたと云つてよいが、たまたまヨーロッパの自然主義などもつとも

新鮮な話題として歓迎された時代で、いはゆる日本の自然主義に属する作家なども殆んど一度は名を列ねるほど盛んになつたから、竜土会は自然主義文学運動のための会合のやうにも伝へられた。しかしそれが誤解であつたことは竜土会の出発から発展、そして解消の歴史が明るくなるに従つてはつきりとなつてきた。

竜土会については、最初からの関係者の一人だつた蒲原有明や、田山花袋、柳田国男その他によつて、個人の立場からではあるが夫々に書かれた思ひ出の記録もあり、その歴史を総合的に調査してみた私の小論(竜土会とパンの会)などもあるから、ここでは詳しく述べないが、さういふ文学者たちの集りが竜土軒で催されるやうになつたのは明治三十六年頃からである。はじめの頃の会の中心的存在だつたと思はれる国木田独歩が、明治四十一年(一九〇八)に病死した頃に竜土会は第一期を終り、大正四年(一九一五)からはふたたび第二期の竜土会が催されるやうになつた。この第二期も永く

古今独宗

因北生

淚洒西風泣
浪湧東海

少人下
覆今春

十本初夜

けさまよい 雨はしたわい

朝の鳥と

夕からず

赤じし

そのくら 長髪の

町や 塵土

臨川

嘆逝水 野迷は

秋をよむ月夜
あはれ
あはれ
あはれ



竜土会初期寄せ書 (その二)

は続かなかつたが、自然主義作家のレッテルをもつた文学者がより多く集つたのはこの第二期である。その一人だつた近松秋江が「自然主義は竜土会の灰皿から生れた」と云つたと伝へられるのも、大正期の竜土会である。

蒲原有明の記するところでは竜土会といふ会名ができたのは明治三十八年（一九〇五）である。会名の起原年代はこのほかに信ずべきものがみあたらない。柳田国男の家に集つてゐた人々が、人数が増えはじめたので他に会場を求めることになり、麴町の快樂亭とか、牛込赤城神社境内の清風亭とか、雑司ヶ谷鬼子母神境内の焼鳥屋（屋号不明）などを転々としたすえに、竜土軒が選ばれたが、当初は無名会と称した。明治三十三年九月の創業以来現在で三代目になるフランス料理の竜土軒には、竜土会の初期にまだ無名会と呼ばれた頃のものと思はれる寄せ書が、幅にされて二通りのこつてゐる。その一つは漫画で、もう一つは文句の筆跡である。

漫画は独歩が「毒喰生」と署名した角のある虎（の如き獣が皿の料理を前肢でとらうとしてゐる）をはじめ、当時の女学生の姿に「崇拜女学生」と書き入れたもの、男の横顔に「有明」と署名のあるもの（蒲原有明は自分で描いたのではないと云ふ）その他、馬を背後から描いて「洒風馬首」と署名のあるもの、小さい市街電車を描つて、その中に ELEVATOR OF EL. RAIL CAR と書き入れ、S. O. N. an Engineer, と署名のあるものである。洒風はフランス文学者でシャトーブリアンの「哀調」（ルネ）の訳者だつた小島金

八で、シャトーブリアンをもつたペンネームである。エンジニアは工学（電気学）を東大に学んだ作家の中沢臨川で、S. O. N. は本名の中沢重雄のイニシアルとみられる。

もう一枚の文句（ペンネームをうたひ込んだものが多い）

だけの方は、上から「古今独歩」国北生（国木田独歩）、「十五初夏、そのくる髪の、艶にいとふか町の塵」ありあけ（蒲原不明）、「鶯がすむ月波の山のやま男」あつし（平塚篤）、「行きはよい／＼、帰りはこわい、朝の鳥と夕からず」などし

こ（小山内薫）、「涙酒西風泣断腸」洒風大俗（小島洒風）、「小人不飲」いはを（武林無想庵）、「臨川嘆逝水」野迷迂人（中沢臨川）である。

これらの寄せ書きには日附がないが、有明が書き込んでゐる「十五初夏……」は「夏祭」の一節だから、執筆年代は大體明治三十六年の夏後半期といふ推定ができる。「夏祭」は明治三十六年（一九〇三）七月号の「明星」に発表されてゐるからである。漫画の方とも筆者が共通してゐるから、大體同じ頃とみて間違ひではあるまい。

どちらの寄せ書も、一番上が独歩であることは、その頃の会が独歩を中心にしてゐたことを物語つてゐる、とみるべきであらう。

独歩は明治三十五年十二月に矢野竜溪の招きで鎌倉から東京へ戻り、芝区（現在の港区）桜田本郷町十七番地に住んで「東洋画報」といふグラフィック雑誌を編集することになった。この雑誌は神田裏神保町（現在の神保町電車通り）の敬業社の

発行で、発行代表者は柴田勝文である。創刊号は明治三十六年三月に出た。その後毎月一回、八月号まで六冊を出して、九月号からは第二巻となつて「近事画報」と改題、翌三十七年二月号まで刊行し、日露戦争がはじまつたので三月号からは「戦時画報」といふ臨時増刊雑誌になつた。独歩が竜土軒の集りに積極的に出席するようになったのは「東洋画報」の発行が軌道にのつてからであらう。

「東洋画報」及び「近事画報」は独歩研究のみならず竜土会の資料としても、かなりの重要性があることはわかかつてゐたが、内容をあらためて詳しく検討してみると、寄稿家の顔ぶれが竜土会、ことに今も竜土軒が保存する寄せ書と一致することがわかつた。掲載目次から文学的項目をざつとひろつてみると次のやうになる。

東洋画報第一巻第一号（明治三十六年三月）

○怠惰屋の弟子入（翻案小説）……国木田独歩

○自動車の話……中沢生（中沢臨川）

○怪物の首（ホオソーンの「叢譚」によるギリシヤの昔話）……蒲原有明

○大飯喰ひ（支那物語）……独歩

第一巻第二号（四月）

○ヴァージル抄話（第一章 木の馬）……なでしこ（小山内薫）

○無線電話……中沢生

○天馬（怪談奇話・前承）……有明

○支那因果物語（前承）……独歩
第一巻第三号（五月）

○天馬後日譚（前承）……有明

○地球の年齢……中沢生

○黒衣仙（支那奇談）……独歩

○舟の少女（支那小説）……独歩

○（読者文芸の落晰選者として東亭扇升（小山内薫）の名がこの号にだけある）

第一巻第四号（六月）

○トロイの掠奪……なでしこ

○地球の年齢（前承）……中沢生

○三騙術（支那物語）……独歩

○舟の少女（支那小説・前承）……独歩

第一巻第五号（七月）

○春朝新夕……森林太郎（鷗外）

○汽車中の読書家……山田美妙

○南木談（楠に関する随筆）……蒲原有明

○石清虚（支那物語）……独歩

第一巻第六号（八月）

○地底の宮殿……小栗風葉

○トロイの陥落（前承）……なでしこ

近事画報（改題）第二巻第一号（九月）

○西南雜記……蒲原有明

○評釈 家内喜多留……小栗風葉

○夏の夜(対話小品)……徳田秋声

○姉と妹(支那物語)……独歩

○初齣……八千代(岡田八千代)

第二卷第二号(十月)

○西南雜記(前承)……蒲原有明

○流れの末(小説)……鈴木秋子

第二卷第三号(十一月)

○銃狛……三島霜川

○評釈 家内喜多留(前承)……小栗風葉

○謝礼の竹筒……鈴木春浦

第二卷第四号(十二月)

○親子(特別金貨百円さがし小説)……独歩

第二卷第五号(明治三十七年一月)

○評釈 家内喜多留(前承)……小栗風葉

○寒月……八千代

第二卷第六号(二月)

○狐と恵比須……鈴木春浦

以上の項目のうち、独歩、有明、なでしこ(小山内)、中沢生(臨川)は、さきの竜土軒保存の寄せ書にもその名が揃つてゐる。それ以上の確かな資料は今のところみあたらないが、この事實は「東洋画報」「近時画報」の編集者独歩と竜土会との関係の緻密さを物語るものだと云つてよい。鎌倉から久しぶりに東京へ戻つた独歩は、グラフ雑誌の編集で生活もおちついたので、柳田国男の家以来の文学上の友人たちと

積極的に交り、雑誌への寄稿を依頼するに好都合であつた。何しろ文学雑誌ではなくて一般向きの家庭グラフ雑誌だつたから、正面切つた文学作品よりも、読み物風の文章がほしい。竜土会のMEMBERならば、そんな注文をするのにも気兼ねがなかつたらう。また寄稿家の方も独歩の新らしい事業に協力するために、それを引き上げたのであらう。有明のギリシヤの昔話、小山内薫(なでしこ)の西洋読物と雜俳家東亭扇升としての落嘶の選者、中沢臨川の専門的な話など、その協力を物語つてゐるやうである。中国風の物語などは独歩自ら書いてゐる。竜土会の寄せ書と雑誌目次のMEMBERの共通してゐるところからみると、独歩は明治三十六年三月からいよいよ「東洋画報」を創刊したのを機に竜土会の世話人となり、それは日露開戦で「戦時画報」を月に二回乃至三回刊行するために多忙になつていつた明治三十七年三月頃まで続いたと思はれる。竜土会の寄せ書がつくられたのは、竜土会(正しくはまだ無名会であつた)が竜土軒でやうやく活潑化した明治三十六年の後半期(七月以降)に於けるものであつたに違ひない。

何れにしても、独歩が一時竜土会の中心人物であつたことだけは、寄せ書の書き方からも容易に想像出来るのである。